

浦賀文化

平成26年(2014年)7月1日

第38号*

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

葛飾北斎と浦賀

江戸後期に浮世絵師として画界に登場してから、九十歳で没するまで、常に新たな絵画様式に挑んだ不撓不屈の画人。
傑作『富嶽三十六景』神奈川沖浪裏は七十二歳の作。

江戸時代を代表する画家・葛飾北斎は、今から二百五十年余り前の宝暦十年(一七六〇)に江戸本所(東京都墨田区)で生まれましました。

五歳のころより自ら好んで絵を描いていた北斎は、幼くして幕府の御用鏡磨師の家に養子に入りました。十五歳のころには木版画を学び、十九歳になると浮世絵師として名をはせていた勝川春章に弟子入りして錦絵の道に就きました。

初めは主に役者絵などを描いていましたが、それだけでは飽き足らず、ひそかに狩野派、琳派、洋風画、中国画の技法を学び、独自の画風を築いていきました。北斎といえ、風景版画の金字塔ともいわれる『富嶽三十六景』に代表される、富士山を描いた一連の作品が思い起こされます。これらの作品は、現代に至るまで多くの人々に親しまれ、ユネスコによる富士山の世界文化遺産登録の決定に大きな役割

を果たしたことは想像に難くありません。

また、『富嶽三十六景』の中でも、現在の横浜市金沢区沖合の風景を描いたと想定される「神奈川沖浪裏」は、グレート・ウエーブと呼ばれて世界中に知られています。特にフランス印象派の画家たちに大きな影響を与えるところにも、レオナルド・ダ・ビンチの名作「モナ・リザ」にも匹敵するほどの名画という評価を得ています。また、音楽家のドビュッシーは、この絵から影響を受け、交響詩「海」を作曲したとも言われています。

この他にも『北斎漫画』(七編)の中に「相模走り水」や「相模浦賀」が描かれています。

一方、北斎は奇行に富んだ人として知られています。貧しい暮らしの中、一生涯に九十三回も住いを変え、画号を三十数回も変えたといえます。

天保年間に彼が江戸の知人に宛てた手紙から浦賀に住んでい

たと伝えられています。しかし浦賀のどこに住んでいたのか分かっていません。

吉井の真福寺の観音堂にある天井画は北斎が浦賀に住んでいたころに描かれたものであり、鶏、魚介などのうち何点かは彼の作品とされています。

北斎は晩年には「画狂老人」まんじと名乗る人物らしく、日々の生活は絵を描くことであり、浮世絵や肉筆画などを含めて生涯に三万点もの作品を残しました。

江戸時代の中ごろから幕末までの九十年を生きた北斎は、嘉永二年(一八四九)に亡くなり、浅草の誓教寺せいきょうに祀られています。

『富嶽三十六景』初編には晩年の心境を次のように書き記し、画業一筋に生きた北斎の心意気を伺うことができます。

自分は六歳のころから本格的に数々の作品を発表してきたが、七十歳より前には取るに足るものはなかった。七十三歳になって、禽獣虫魚の骨格、草木の出生をいくらか悟り得た。であるから(努力を続ければ)、八十歳になればますます進み、九十歳にしてその奥意を極め、百歳になればまさに神妙の域に達す

るのではないか。百何十歳になれば、一点一格が生きているようになることだろう。願わくば長寿をつかさどる神、私のこの言葉が偽りでないことを見ていて下さい。(現代語訳)

(芳賀久雄)

鏡磨師：銅鏡や庶民にも普及していた懐中鏡・柄鏡などを磨く職人



「相州浦賀」 千絵の海より

★参考文献

- 「横須賀人物往来」 田辺 悟 横須賀市生涯学習財団
- 「北斎展 HOKUSAI」 日本経済新聞社
- 「日本歴史人物事典」 朝日新聞社
- 「巨匠たちの富士」 野地耕一朗 読売新聞社



歴史 語りい座・浦賀 三十八

郷土史家

山本 詔一



『近世浦賀畸人伝』 口

桐谷道意

桐谷道意は浦賀に奉行所が置かれたころの享保年間に、越後国寺泊から海路渡って来た来住者であった。桐谷の所持していた船は二百石積みで、「波わたり諸材を運送する船主」と書かれているので、特定の商品で特定の場合へ運搬する定期航路ではなく、商品になりそうな物をよい値で買ってくれそうな場所へ運び、利益を得るタイプの廻船であった。

そんな桐谷が享保のはじめごろというから、浦賀へ奉行所が移転してきたころであろう。浦賀湊へ入ったとき「風土を觀して何となくここに生涯を送らばや」と浦賀のすべての環境が気に入りに、ここで生涯をおくことを決めた。このとき桐谷はまだ二十代のはじめであった。

桐谷はすぐさま浦賀に住居を構える準備に入り、船とその積み荷をお金に換えて、乗組員たちに分け与え、さらに故郷寺泊でもすべて清算して、浦賀での生活を始めた。

しかし、浦賀での生活は楽なものではなかった。もっていたお金も底をつき、故郷からの便りも途絶え、孤独感に耐え、自らも使う側から使われる側に代わって、早朝から魚を売り歩き、夜はまた別の仕事をするという苦難な生活をしてきたが、やがて、こうした努力が報われ、共に

暮らす家族ができ、生活ぶりも豊かなものになっていった。『畸人伝』は彼を「徳人」と称している。

三十代後半になって幸福な家庭をもった桐谷は男の子に恵まれた。その子も「随意」（庄之助のちに八兵衛）として『畸人伝』に登場する。『畸人伝』では「随音」としてあるが法名は「随意」が正しい。

父の教えを受け継ぎ、「質朴綿密にして、勤儉をわすれず、常に綿衣をまとい、わら沓を穿つ」と質素儉約を忘れず、木綿の着物、わらざうりに穴があくぐらい履くスタイルで、道理を重んじ非義を悪む「篤厚者と称されている。彼は常に「私には学問はない。ただ三宝（仏・法・僧）を尊び、役人をおそれ、年長者を敬うことを信念にしている」と記している。

仕事では「櫓づくりの名人」であり、船人で彼の仕事を称賛しない人はいないほどの匠であった。

『畸人伝』の編著者である樋口有柳は東浦賀・専福寺にある桐谷親子の墓石に碑文を認めている。有柳にとつても大切な親子であったことが窺える。

小川銀甲

小川銀甲は廻船問屋の主人で、藤左衛門といった。岡田米仲の門人となつて俳諧を学んでいた。米仲は江戸・霊岸島の商人といわれ、江戸座

の俳人のことを記した「韃隨筆」や知己の俳人が自筆の句に画をいれた句画集「たつこのうら」などが残っている。銀甲とは俳諧だけでなく、廻船問屋としてつながりも考えられる。銀甲の号は、『徒然草』の作者吉田兼好を敬愛し、「ケンコウ」になぞらえて、「ギンコウ」にしたという。また兼好だけでなく『徒然草』も暗誦して、「万巻の書ここにたれりとす」と言い切っている。

『畸人伝』に銀甲の辞世の句「おくれたり 淡ゆき消えぬ 是は是は」が記されているが、これも師・米仲の「富士の根の 雪もみな月 是は是は」になぞらえたもので、米仲への心酔ぶりがよくわかる。

銀甲の追善集として寛政二年（一七九〇）に『雪解の沢』が刊行されている。『畸人伝』に銀甲の友人として、平砂・秀億・午呑の三名が上がつているが、現在の私の力ではどんな人物であったのかわからない。ただ、岡田米仲の墓石に秀億と午呑（本当は牛呑であるらしい）の二人の名が刻まれている。

銀甲の時代より後になるが、日本で最初に蒸気機関を造ることに成功した川本幸民がある事情で、小川の家で軟禁状態で預けられていたことがあった。これなども当時の小川の家が、いや浦賀がどのような町であったのか探る意味でも興味深いことである。

笑話一題

ご縁があつて、こちらに勤めさせていただいてちょうど一年になりました。横須賀に住んで十ウン年経ちましたが、海あり山あり夏の暑さも冬の寒さも比較的穏やかで（この冬の大雪には驚きました）自然豊かで住みやすさバツグン！なところが大変気に入っています。

愛宕山、明神山、燈明堂、浦賀ドック、浦賀奉行所跡、渡し船など足を運んでみたりして：改めて浦賀の地の歴史の奥深さを感じています。祭りも盛んです。二十以上の神輿や山車が街をねり、各町内でその勇壮さを競い合う『叶神社例大祭』が圧巻です。朱の面に一本下駄の猿田彦が先導役に立つのは三年毎だそうで、是非見てみたい。『浦賀みなと祭』や、古くからの伝承を受け継いでいる『虎踊り』など魅力いっぱい。浦賀

今日は何を感じるかしら：

Y・T



浦賀コミュニティセンター分館

郷土資料館

2階にある郷土資料館をご存じですか？

当館は、昭和57年4月、旧浦賀ドックの迎賓館があった場所に、横須賀市で最初の本格的な常設展示を持つ施設として誕生しました。

浦賀奉行所、鳳凰丸、咸臨丸、黒船、船番所、幕末の西浦賀の街並みの模型や中島三郎助に関する資料など、小規模ながら浦賀に関する資料がたくさん展示されています。

夏休みにご家族で見学にいらしては、いかがでしょうか？